放送番組センターレポート

BROADCAST LIBRARY Report

2017.10 No.32

（公財）放送番組センター

〒231-0021 横浜市中区日本大通11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110

http://www.bpcj.or.jp/

TOPICS 今号のトピックス

■公開セミナー　制作者に聞く！～番組制作の現場から～「朝まで生テレビ！」
■TBS「世界遺産」放送20周年企画 展示会・公開セミナー
■NHK・民放合同の番組上映会（長崎・広島）
■公共施設と大学での番組利用
■夏休み放送体験教室2017　開催
■放送ライブラリー公開番組の紹介

■公開セミナー 制作者に聞く!「朝まで生テレビ!」

話題になった番組の制作スタッフから、番組誕生のいきさつ、番組にかけた思いなどを聞き、放送現場の“今”を伝える公開セミナー「制作者に聞く！」を6月10日に開催した。今回は、今年4月に放送開始から30周年を迎えた「朝まで生テレビ！」（テレビ朝日）を取り上げた。

[登壇者]　田原総一朗（ジャーナリスト）
　　渡辺　宜嗣（テレビ朝日キャスター）
　　鈴木裕美子（チーフプロデューサー）
　　吉成　英夫（チーフディレクター）
[司　会]　川瀬眞由美（広報局お客様フロント部長）

放送開始は1987年4月。政治家、学者、ジャーナリストなど各分野の第一線の論客が緊張感溢れるディベートを繰り広げる、画期的な討論番組だ。時事問題から暴力団、部落、原発、天皇など、扱いづらいテーマも敢えて取り上げ、毎月の最終金曜日、深夜3時間の生放送で、立場や世代の異なるパネリストが丁々発止の議論を繰り広げてきた。

きっかけは、86年に田原氏が“低予算・長時間枠”の深夜番組の企画を頼まれたこと。折しも東西冷戦が終わり、新時代の到来が予想されていた。「今までの常識や秩序は全部ひっくり返される。そこで、もし負けたら政治生命、学者生命がなくなるくらいの真剣勝負の討論をやろうと考えた」と田原氏。プロレス風の無制限一本勝負なら、長時間でも刺激的で視聴者を飽きさせない。「声の大きさや表情、身振り手振りなど、話者の全てが映し出される討論は、実はとてもテレビ向き」という。

その後、昭和天皇の容体が悪化した88年秋に天皇論を初めて取り上げたのを皮切りに、次々とタブーに切り込んでいった。革新的だったのは、原発問題なら反対派と推進派、部落問題なら政治的背景が異なる3団体というように、様々な立場の論客が一堂に会したこと。田原氏は「日本が先の戦争を起こしたのは、言論の自由がなかったから。『言論の自由は命をかけて守らなければいけない』という考えが『朝生』の基本にある」と強調した。

番組開始当初から司会を務める渡辺氏は、「自分の役目は、リングアナウンサーとして視聴者とのパイプを繋ぐこと」と語る。「放送が終ると、胸のつかえが解放される。テーマとなった問題について、意見の異なる人たちが真剣に論じ合った結果、“出口の入口”が見えたような気がする」という。また、「テレビは正直で、顔では同意しているように見えるけれど、実は腹の中では反対のことを考えているのを見事に映し出す。嘘をつく政治家や官僚を見抜いてほしい」と語った。田原氏も、「政治家や学者は本音を言いたがらず、ごまかそうとする。よく『田原はすぐに人の話を遮る』と言われるが、政治家たちが本音を語らず難しい専門用語を使ってごまかそうとしている時に、『違うだろう』と割って入る」と同意した。

吉成氏も開始当時から番組に関わり続けているディレクター。政治家や学者のほか、暴力団組長やオウム真理教など、延べ5000人にものぼるパネリストの出演交渉を、まさに命がけで担当してきた。パネリストの選定は、「その分野のキーパーソンに会って意見を聞いたり、候補者の著作を読んで会いに行く」という地道な作業。各ゲストが入場する際の呼び出しコメントを書いているのも吉成氏で、オンエア当日に、出演者のブログなどを見て文案を練るという。

チーフプロデューサー4年目の鈴木氏は、『朝生』が“国民的番組”と言われることについて、「88年の年末、昭和天皇の闘病で重苦しい自粛ムードの中、真正面から『昭和と天皇』を論じた。戦争と平和を包括した昭和という時代を、様々な立場の論客が論じ、そこに等しく昭和を

生きた己の人生を視聴者は重ね合わせた。『昭和をもう一度考えたい』という気持ちを、番組と視聴者が共有したこの時に、『朝生』は国民的な番組になったのだと思う」と語った。また、「今年の元旦にも天皇制を取り上げたが、非常にのびやかな議論となった。88年の天皇論からスタートして、自由にものが言える社会を作り上げようと毎月真剣にやってきた成果が、2017年の今、こういう自由闊達な議論に結びついた」と振り返った。

30年間番組が続いた陰には、生放送を支える卓越した技術スタッフの存在がある。音声マンは、十数人もの出演者が喋り合う中で、今誰の声を聞かせるべきかを瞬時に判断して音量を調整している。カメラも、ドラマや音楽番組の熟練カメラマンが揃う。鈴木氏は、「技術スタッフには、各パネリストの最近の意見をまとめた分厚い資料が放送1週間前に渡される。すると彼らは『この人はこういう意見だから、この人と対立する』という構図を組み立てる。当日は田原さんの進行に合わせて、次はこの人が来そうだと読んで、指示を待たずに動いている。まさに職人技で、感覚的に優れているだけでなく、ものすごく勉強している知性派揃い」と太鼓判を押した。

オンエア中、視聴者からの電話は約500本、メールも約200通届くという。鈴木氏は「生で見ている視聴者は、リング外のファイターとして参加していただいている感じ。スタジオの中では見えない、バラエティに富んだ意見や感想を送ってきてくれ、私たちが分からなかったことを教えてくれる。放送して本当に良かったと思う瞬間」とやりがいを語った。

話は終盤まで盛り上がり、「続きは40周年の時に」と司会の川瀬氏が締めくくった。日本と日本人を論じ続けて30年。熱い制作者たちに会場からは大きな拍手が送られた。

■TBS「世界遺産」放送20周年企画 展示会・公開セミナー

TBS「世界遺産」は、昨年4月に放送20年、本年4月に通算1000回の放送を迎えた。放送ライブラリーでは、7月14日～9月10日、放送20周年企画として、「『世界遺産』20年の旅展」を開催した。

会場では、番組20年の歩みを振り返ると共に、世界遺産を知り尽くした、番組スタッフの視点で、番組、及び世界遺産の魅力を伝えた。4Kシアターでは、4K画質で、TBS「世界遺産」を上映。細部まで鮮明で美しい超高精細の映像で番組を紹介した。期間中、番組ファンを始め、多くの方が来場し、「実際に取材した方々のコメントが興味深かった」「テレビで観るだけだった番組を、携わった方々の想いなど含めて、改めて見直す事が出来、大変面白かった」「4K映像の美しさには驚いた」など、多くの感想が寄せられた。

展示会開催中の8月26日、公開セミナー 制作者に聞く！ TBS「世界遺産」を開催。プロデューサーの高城千昭氏、ディレクターの小澤政志氏と田口亮氏が登壇し、番組への思いや取材のエピソードなどを語った。

高城氏は、20年に渡り、ディレクター、及びプロデューサーとして番組に携わっている。ディレクターとしては2008年以前の夜11時台を多く担当した。小澤氏は番組が夜6時台に移った2008年からディレクターとなり、現在も世界各地の取材を続けている。田口氏は、2015年から番組に関わり、ドローン撮影や4K撮影の回などを担当している。

最初に、記念すべき第1回放送「マチュ・ピチュ」を上映。高城氏が「1996年に番組が始まる時には世界遺産というのは、ほとんど知られていなかった」と振り返った。そして時代は移り、昨年20年目の節目に4回目の「マチュ・ピチュ」が放送された。この取材では、世界で初めてドローン撮影が許可された。担当した田口氏は、プレゼンテーション映像を撮影するなど、許可を得るまでの秘話を明かした。その結果「ただ単にドローンで撮ったというだけでなく、学者も驚く位の、遺跡の形や今まで見えなかったアングルがはっきり見える映像が撮影出来た」と田口氏が言うと、高城氏が「『世界遺産』という番組は、その時の最新映像機器を使って撮影し、世界遺産のライブラリー化を進めている側面もある。20年前と今の映像を見比べると昔の映像は汚く感じるが、20年前の撮影もデジタルベータカムという最新の機器を使い、放

送後『さすがにデジタルベータカムは綺麗。格段に違う』と言っていた。これが時代だと思う」と感慨深く語った。

次に、3人の想い出の世界遺産を映像と共に紹介。小澤氏が選んだのは、オーストラリアのマッコーリー島。マッコーリー島は、1年に1度だけ調査船が出る。この調査船に乗るためには、1年前に申請を出さなければならず、そのために1年前から準備を始めなければならない。小澤氏は「本当に秘境中の秘境で、名前も知らなかった」という。マッコーリー島はペンギンの楽園。島の固有種であるロイヤルペンギンを始め、約200万羽が生息する。植物の種など外来種を持ち込んではいけないため、上陸までに様々な厳しいチェックを受ける。小澤氏が取材写真を紹介しながら、取材の苦労、ペンギンやゾウアザラシの様子などについて語った。小澤氏は「もう1回行けと言われたら行かないと思う」と笑い、「あんなにペンギンに囲まれる経験は一生のうちであまりないと思うので、とても凄い経験をさせて貰ったと思っている」と続けた。髙城氏が「世界遺産は、誰もが知っている有名な所もあれば、誰も知らないマッコーリー島やヨーロッパの小さな村が世界遺産になっている場合もある。有名な所も無名な所も、1本の木も、巨大な滝も、何万羽のペンギンも、それぞれ均等の価値があるとしているのが世界遺産。私達も同様にどの世界遺産も均等の価値を持つものとして、同じ30分の番組として紹介してきた」と番組が踏襲してきた姿勢について述べた。

田口氏は、ベネズエラのカナイマ国立公園を紹介。断崖から流れ落ちる巨大な滝を、ヘリコプターに4Kカメラを搭載し、大迫力の映像で撮影した。髙城氏は、マウンテンゴリラの聖地、ブウィンディ原生国立公園を挙げ、ゴリラの国際ルールやゴリラトレッキングについて説明し、「ゴリラは幸せな気持ちにさせてくれる。ゴリラの研究者の山極先生が『ゴリラが生きられないような世の中は、人間も生きられるはずがない』と仰った。非常に良い言葉だと思い、その事を感じながら世界遺産そのものの撮影にも向き合っている」と語った。

最後に髙城氏が「この番組が始まった当初、代理店の方から言われた『視聴率も大事だが、視聴質が大切だから本当に愛してくれる人のために番組を作っていこう』という言葉が非常に心に残っている。今でも視聴質という言葉は座右の銘にしている。これからも映像の力を生かすような番組を作り続けたい」と締めくくった。

■NHK・民放合同の番組上映会（長崎・広島）

今年の夏も、放送番組センターと長崎・広島のNHK、民放テレビ局が連携し、被爆・平和関連番組の上映会を開催した。上映した番組は各局が制作したドキュメンタリーやドラマなどで、一部の未公開番組を除き、横浜の放送ライブラリーからストリーミング送信した。また、今年は初めて広島と長崎の番組の“相互乗り入れ”を試みた。いずれの会場でも昨年より来場者が増加しており、この上映会の認知度が徐々に高まっていることが伺えた。

【長崎】『NHK・民放4局番組上映会　テレビが伝えた被爆の記憶　from　ナガサキ』
期間：7月30日～8月6日（計8日間）
会場：長崎原爆資料館　原爆資料館ホール
主催：NHK長崎放送局、長崎放送、テレビ長崎、長崎文化放送、長崎国際テレビ、長崎市
共催：放送番組センター

長崎での開催は昨年に続き2回目。上映会は「オープニングセレモニー」で幕を開けた。各放送局のアナウンサーがステージに立ち、日頃の番組制作の一端を紹介しながら、上映する自局の番組の見どころをアピールした。上映番組は、広島の5局が制作した番組5本を含む合計２０本。８日間の来場者は1,４６３人（１日平均１８３人）だった（昨年は7日間で1,147人来場）。

【広島】『NHK・民放番組上映会２０１７　テレビが記録したヒロシマ』
期間：８月１４日～１８日（計５日間）
会場：広島平和記念資料館　メモリアルホール
主催：NHK広島放送局、中国放送、広島テレビ、広島ホームテレビ、テレビ新広島
共催：放送番組センター、広島平和記念資料館、広島市

３回目の開催となる今年は、より多くの来場者を期待できる広島平和記念資料館を会場とし、長崎の5局が制作した番組5本を含む合計２２本の番組を上映した。資料館を訪れる多くの外国人を想定し、一部の番組では英語字幕版も上映した。5日間の来場者は1,２４１人（１日平均２４８人）だった（昨年は１０日間で６１９人来場）。

◀オープニングセレモニー（長崎）　原爆資料館ホール

■公共施設と大学での番組利用

【岡山県立図書館】

6月24日に運用を開始した岡山県立図書館内の番組視聴コーナー「OKAYAMA情報チャンネル」では、7月4日時点で合計26番組が視聴可能となった。これは、放送ライブラリーが公開している番組のうち、地域にちなんだ番組の一部をストリーミング送信して視聴してもらう「サテライト・ライブラリー事業」のサービスで、今後も同図書館の要望に応じ、順次番組を追加する予定。

【長崎県立大学】

国際情報学部情報メディア学科・前期「映像研究」(村上雅通教授)で、民放が制作した2番組が利用された。この講義では、授業以外の予習・復習の時間にも、指定された教室で番組を視聴できるシステムを採用した。学生からは「2度、3度見ることで、以前は気付かなかった新しい視点を見付けられる機会が増えた」「自分のペースで番組を見ることができ、感想や考えをまとめるのに十分な時間を取ることができた」等の感想が寄せられた。

■夏休み放送体験教室2017　開催

放送各社の協力および諸団体の助成を受け、小中学生向けの各種体験教室を、下記のとおり実施した。

◇日テレ体験教室
7月22日(土)
参加者:156人
講師:日本テレビ放送網
対象:小4~6年生と保護者
子どもゆめ基金助成事業

◇ラジオ・DJ体験教室
8月1日(火)
参加者:25人
講師:FMヨコハマ
対象:小4~中学生
放送文化基金助成事業

◇アナウンサー体験教室
8月10日(木)
参加者:35人
講師:フジテレビ
対象:小4~6年生
放送文化基金助成事業

【上智大学】

文学部新聞学科・前期「デジタル・アーカイブ論」(柴野京子准教授)で、放送番組センターが1970年代に制作した15番組が利用された。講義では、番組のメタデータ作りを体験する目的で、番組の視聴と共に、台本を参照しながら番組データをまとめていく作業を行った。学生からは、「番組の中からエッセンスを抽出するのは難しくもあったが面白かった。利用者の側に立ち、どのように活用できるのかを考えながらの作業はやりがいがあった」「メタデータ作りは、その作品を正しく後世に伝える責任を負うことであり、緊張感と共に充実感を感じた」「海外の専門機関への取材などは実際の放送番組だからこそで、授業で番組を活用する意義を感じた」等の感想があった。

【公開セミナーの開催】

大学での番組利活用の事例と成果を報告し、番組の利用促進に向けて意見交換をする公開セミナー「大学における映像アーカイブ活用と新たな展開」を、11月18日、上智大学で実施する。登壇者は荒巻龍也氏(筑紫女学園大学教授)、伊藤守氏(早稲田大学教授)、丹羽美之氏(東京大学大学院准教授)、柴野京子氏(上智大学准教授)。司会は音好宏氏(上智大学教授)。

■放送ライブラリー公開番組の紹介

放送ライブラリーではテレビ番組16,045本、ラジオ番組4,284本、テレビ・ラジオCMを10,796本、劇場用ニュース映画2,683項目を横浜の施設内で一般に無料公開している(8月末現在)。29年度7月、8月に追加公開した主な番組は以下の通り。

【テレビ番組】

◇『SONGS　沢田研二　ザ・タイガースを歌う』2012年1月18日放送・NHK
◇『徹子の部屋　追悼　高倉健さん』『徹子の部屋　追悼　菅原文太さん』2014年11月19日、12月2日放送・テレビ朝日
◇『RCCニュース6　シリーズ「ヒロシマ70年」　「平和塔」の真実』2015年3月8日放送・中国放送
◇『ファイト!　難病と闘うプロ野球選手』2013年4月20日放送・中京テレビ放送

【ラジオ番組】

◇『ラジオ深夜便　新春インタビュー　声の出る限り　噺家人生65年　桂歌丸』2016年1月3日放送・NHK
◇『現代の音楽　放送50年　この半世紀を振り返る』〔1〕~〔3〕2007年11月25日放送・NHK
◇『役に立ってこそ役人!　スーパー公務員　高野誠鮮』2015年12月27日放送・北陸放送
◇『CBCラジオ特集　全力パパ』2017年2月25日放送・CBCラジオ